

09-10

経鼻胃管で改善した妊娠悪阻の1例

前橋赤十字病院 産婦人科

星野江里加、鈴木 大輔、曾田 雅之、塚越 規子、
大澤 稔、山田 清彦

【はじめに】妊娠悪阻は全妊婦の0.5%前後に発症するといわれている。一般的な治療は末梢静脈路からの栄養管理であり、多くは妊娠16週までに軽快するといわれている。今回我々は重症妊娠悪阻に対し経鼻胃管を挿入し経腸栄養を行った。その結果10日間ほどで改善傾向に向かい、栄養状態も改善を認めた症例を経験したので報告する。

【症例】32歳女性、0経妊0経産。既往歴：特記すべきことなし

【現病歴】男性因子のため6回目のICISで妊娠成立した。妊娠6週より妊娠悪阻症状が出現し、前医で入院治療していた。当初は末梢静脈から栄養管理されていたが、長期にわたる点滴のため末梢血管確保困難となりPICカテーテルを挿入し管理されていた。しかし1週間ほどで静脈炎を併発したためPICカテーテル抜去となった。その後里帰り出産を希望され、妊娠15週4日に当院転院となった。当院でも末梢血管確保困難のため、中心静脈ライン(CV)を挿入して管理開始した。中心静脈ラインが長期にわたると感染のリスクが高まると考えられたため、16週2日に経鼻胃管を挿入し経腸栄養管理を開始した。その後10日ほどで徐々に食事摂取可能となり、悪阻症状、栄養状態ともに改善され18週1日に退院となった。

【まとめ】妊娠悪阻に対しては経静脈栄養による栄養管理が一般的であるが、経腸栄養を行う方が安全で栄養学的にも有利と考えられる。経鼻胃管による栄養管理で妊娠悪阻が改善したという症例報告は非常に少ないが、本症例においては経腸栄養開始とともに1週間ほどで悪阻症状が著明に改善した。中心静脈から高カロリー輸液を必要とするような重症妊娠悪阻に対して、経鼻胃管から経腸栄養を行うことにより悪阻症状が改善または維持できる症例があることが示唆された。

09-12

術前診断が困難であった巨大腹腔内腫瘍の一例

姫路赤十字病院 産婦人科

長谷川育子、太田 友香、佐野 友美、三原真奈美、
榎 笑美子、立岩 尚、水谷 靖司、小高 晃嗣、
赤松 信雄

悪性腫瘍との鑑別が困難であった巨大腹腔内腫瘍の一例を経験したので報告する。

【症例】45歳未経妊未産

【既往歴】脳性小児麻痺、知的障害

【現病歴】数ヶ月前より腹部膨隆を認め、1ヶ月前より急激に増大するため、近医受診。剣状突起まで至る巨大多房性嚢胞性腫瘍を認め、当院紹介。骨盤MRIでは骨盤内から腹部に広がる30×13×38cm大の境界明瞭な巨大腫瘍で、子宮は頭側に引き伸ばされていた。腫瘍の内部は嚢胞成分と充実成分からなり、内部に出血を示唆する斑状高信号域が散在していた。正常両側卵巣が確認できること、腫瘍の充実部と子宮底部筋層との境界が不明瞭な点より子宮由来の子宮肉腫などの悪性腫瘍が疑われた。リンパ節転移・播種を疑う所見はなかったが、PET-CTでも腫瘍の充実部にFDG集積を認め、悪性腫瘍の可能性が示唆された。術中所見は広間膜内に発育する巨大な嚢胞性腫瘍で、癒着はなく、両側付属器に異常を認めなかった。視野確保が困難であったため、黄色透明漿液性の嚢胞内容物を穿刺吸引し、子宮および両側付属器とともに腫瘍を摘出した。腫瘍内容液は合計7050ml、子宮と両側卵巣および腫瘍の重量は3000gで、術中迅速病理診断で悪性所見は認めなかった。腫瘍は子宮体部の後方に付着しており剖面では子宮底部と連続性が認められた。腫瘍の充実部には出血・変性を伴う部位が認められた。病理組織診断では平滑筋細胞の束状増殖と、一部に浮腫を伴っており、肉眼的に出血を伴っていた部分には子宮内膜が認められ、悪性を示唆する所見はなく、子宮腺筋腫の診断であった。

09-11

悪性疾患との鑑別を要した性器結核の1症例

北見赤十字病院 産婦人科

水沼正弘、金 美善、東 大樹、足立 清香、
足立 英文、倉橋 克典

【はじめに】結核感染症の減少とともに、女性性器結核患者に遭遇する器械は極めてまれなものとなっている。肺外結核の病像が悪性疾患と類似して、診断、治療に難渋することも報告されている。今回我々は進行した子宮体癌を想定して検査を進めたところ、性器結核と診断し得た症例を経験したので報告する。

【症例】患者は68歳。統合失調症にて40年ほど、精神科病院に入院中。この病院スタッフによって左乳房の直径6cmほどの腫瘍を見つられ、当院外科紹介。乳房の細胞診、組織診にて乳癌を診断。さらに転移癌などの確認のため、CT施行したところ子宮内腫瘍、膨大動脈リンパ節腫大などを認められ、子宮体癌疑いで当科に外科より紹介された。当科初診時、子宮内腔に膿汁の貯留を認め、子宮頸部、内膜細胞診および内膜組織診などを行った。この組織検査結果で乾酪変成壊死を伴う肉芽腫が認められ、結核感染が示唆された。子宮内膿汁の抗酸菌染色では菌体の証明ができなかったが、クオンティフェロン、膿汁の結核菌PCR検査陽性で結核と診断され、当科初診から4週後より内科で治療開始、さらにその4週後乳癌の手術も行われて、経過順調である。

【結語】婦人科領域で、腫瘍を形成するなど悪性疾患と間違われやすい病態にはこのほかにも放線菌感染症、皮様嚢腫の内容物漏出などがある。これらを念頭に置いた精査を進め、必要ならば術中迅速病理検査なども行って適切な治療を行うよう努めたい。

09-13

婦人科疾患における化学療法導入時のオリエンテーション評価

高山赤十字病院 看護部

中島 寧子、西谷 香織、森本 博美

【はじめに】当病棟の先行研究で、化学療法を受ける患者へのオリエンテーション基準を作成し3年経過した。今回は化学療法の副作用に焦点をあて、オリエンテーションによって副作用の予防や軽減の方法がイメージでき、それを実際の生活に取り入れることができたか、不安が軽減できたかを評価したので報告する。

【方法】40～70歳代の婦人科疾患患者8名にオリエンテーション方法・パンフレット・副作用の出現と対処・不安についてインタビューをし、カテゴリ別に分類した。

【結果】大カテゴリーとして、副作用の不安、副作用の対処、日常生活への影響、家族との関わり、その他に分類された。副作用の不安としては脱毛の不安を訴える患者が全員だった。オリエンテーション後に脱毛に対する準備・脱毛出現時の対処をしている患者は全員だった。

【考察】オリエンテーションを受けたことによって、脱毛への外見的な対処はできたが、脱毛への不安は軽減されることが分かった。患者が実際に脱毛を経験するとき、このことを念頭において患者に寄り添うことが重要であると考えられる。治療を行って途中で家族の支えは患者の力になると言えるが、家族に支えられている患者もいる一方で、様々な事情により、家族の協力が得られない患者もいた。患者それぞれの家族背景や家族に対する思いについて情報収集・アセスメントし、それらを考慮したオリエンテーションが必要である。

【おわりに】現行のオリエンテーションは有用だということがわかった。これに加え、患者の背景を捉えることが重要であり、今後は患者・家族に対して個別に対応していきたい。

10月20日(木)
一般口演